神に対する信仰―礼拝（サラート）

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

朝の静寂を破る礼拝の呼びかけ

筆者がイスラームを初めて意識したのは、大学を卒業する年の３月、インドを訪れたときのことであった。外は真っ暗で、まだ夜も明けていない。「なんだ、この音は」。そう思ったのがきっかけであった。日本に帰国してしばらくして、インドにも多くのムスリムが住んでいることを知り、外で響いていた音が礼拝への呼びかけ（アザーン）であったことに気が付いた。

イスラームとは

「イスラーム」というアラビア語は、唯一なる神であるアッラーへの服従を意味する。神に対して服従する者がムスリム、つまりイスラーム教徒である。それゆえ、彼らの信仰は、神に服従するという意味でイスラームであり、自らをムスリムと呼称する。

日本では、例えば天理教やキリスト教のように、宗教を表す語として「教」が用いられてきた。もちろん、そうではない宗教団体も数多く存在する。こうした問題に対して、ムスリムら信仰者は「イスラーム」という語を用いているが、その理由は以下のクルアーンにある。

> 今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教（dīn）を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための宗教として、イスラームを選んだのである（クルアーン５章３節）。

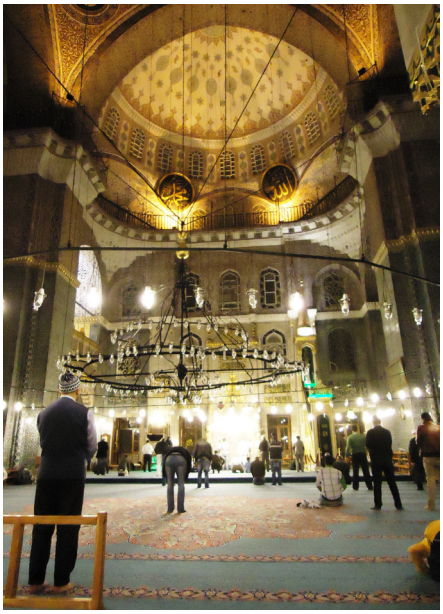
このクルアーンの一節に見える「宗教」と翻訳することの是非はともかく、この神の啓示を通して、彼らの信仰体系に対する呼称は、アラビア語の「イスラーム」であることが基本的に受け入れられている。イスラームの信仰は、神と一対一で向き合うものであり、個々人が教えを忠実に遵守するかにかかっている。したがって、神への服従を示す礼拝はムスリムにとって非常に重要である。

マレーシア国際イスラーム大学のモスク
（左に見える塔がミナレット）

礼拝は眠りより良い

礼拝への呼びかけであるアザーンは、夜明け前の礼拝に対する呼びかけのみ、「礼拝は眠りより良い」という文言が入る。礼拝への呼びかけは、「神は偉大なり」（アッラーフ・アクバル）からはじまる[(1)]。さらに、「私はアッラーのほかに神はいないことを証言します」と「私はムハンマドが神の使徒であることを証言します」という文言が続く。これらの文言は「信仰告白（シャハーダ）」と呼ばれ、イスラームへの入信の手続きのなかで用いられる。

さらに、礼拝の呼びかけは「礼拝へ来たれ」、「成功のために来たれ」と続く。この一連の流れのなかで、寝ている者たちを起こす言葉が「礼拝は眠りより良い」なのである。日本的に言えば、「早起きは三文の得」という感じに近いかもしれない。


礼拝を行う人々
（トルコ・イェニジャーミー）

礼拝の呼びかけは、拡声器が登場するまで、ミナレットという塔に登って行われた。モスクの場所やスピーカーの位置によっては、耳をつんざくばかりの音量である。筆者はマレーシアやエジプトに留学していたが、アザーンで起こされた経験が何度もある。小さなモスクであれば、呼びかけを行っている者（ムアッズィンという）の顔は分からないが、慣れてくると声を識別できる。顔なじみならぬ、耳なじみである。

礼拝の方角

礼拝は１日５回、イスラームの聖地マッカ（メッカ）に向けて行う。マッカへの方角はキブラと呼ばれている。マッカに立っているカーバ神殿に向けて礼拝しているわけであるが、マッカへの礼拝の方角は、イスラーム暦が始まった西暦 622 年に定まった。この年は、ムハンマドをはじめとするイスラーム共同体が、マッカを追われ、マディーナ（メディナ）へ移住した年である。ただし、この移住は当事者たちにとっては「聖遷」（神の意志による移住）であった。「ヤスリブ」と呼ばれていた土地は、「街」を意味するマディーナへと改称されている。預言者ムハンマドは、ヒジュラ以降、基本的にマディーナで生活するようになった。

イスラームでは天文学が発展したが、その理由は、礼拝の方角を星との位置関係から正確に割り出すためであった。イスラームでは純粋な太陰暦を用いている一方で、礼拝の時刻は太陽を基準とし、影の長さで礼拝時刻を判断してきた。そのため、礼拝の時刻を知る意味でも天体観測は重要であった。

マレーシア留学時のある日、金曜日の集団礼拝とは関係ない筆者が、寮へ帰ろうと道を歩いていたときのこと、バイクに乗った学生たちが叫びながら、筆者の横を通り過ぎていった。「ハイヤッ・サラー！」（礼拝へ来たれ！）

［註］

（1）多数派であるスンナ派と少数派であるシーア派では、呼びかけの仕方が異なっている。シーア派では、「私はアリーが神の友であることを証言します」という文言が追加される。アリーとは、預言者ムハンマドの従兄弟で、スンナ派では第４代カリフ、シーア派では初代イマームを務めた人物である。